

民間連携で社会課題に取り組む

日本発の優れた技術やアイデアを途上国とマッチングさせるJICAの民間連携事業。
手を取り合いながらSDGsに貢献する、3つの事例を紹介しよう。

CASE 1 CAMBODIA [カンボジア] × トッププランニングJAPAN

カシューナッツ産業を支援し 殻は次世代バイオ燃料に

世界有数のカシューナッツ生産国であるカンボジア。世界遺産サンボア・プレイ・クック遺跡群で有名なコンボントム州にてカシューナッツの加工工場を運営しているのが、建設事業や再生可能エネルギー事業を手がけるトッププランニングJAPANだ。カシュー

ナッツ事業を始めた経緯について、経営企画室室長の今橋隆之さんはこう振り返る。
「再生可能エネルギー事業の一環でバイオマス発電に取り組むなかで、パーム油の代替燃料としてカシューナッツ殻を搾った油に注目し、調査を始めたのがきっかけでした」



日本で販売開始した有機JAS認定「マダム・ライホーのカシューナッツ」は大粒で濃厚な味。

そこでカンボジアのカシューナッツ産業の現状と課題に直面する。国内に大規模な加工工場がなく、生産されたカシューナッツの大半が隣国ベトナムに原材料として殻付きのまま輸出されていた。加工とバリューチェーン構築のため案件化調査をJICAに提案し、中小企業・SDGs ビジネス支援事業に採択された。
「小規模ながら伝統的な手法で、甘味が強く濃厚な風味のカシューナッツを加工している女性起業家ライホーさんとの出会いがありました。我々のノウハウを生かして、衛生管理の整ったパイロット工場を建設しました」
村周辺の契約農家の安定的な収入と、コロナ禍で仕事なくなり地元に戻った出稼ぎ労働者など100人近くの雇用にもつながった。
「国際規格で最も大きい粒のカシューナッツが日本に輸出され、スーパーで手に入るようになりました。産業廃棄物のカシューナッツ殻を絞った油はバイオマス燃料として、搾りカスも助燃剤として可能性を秘めています」
カンボジアのカシューナッツ産業に貢献するとともに、日本の再生可能エネルギー事業に風穴を開ける取り組みとしても期待される。

1 2 有機JAS認定やHACCPを取り、衛生管理が徹底された工場で、選別して実と殻に分ける。3 カシューアップルと呼ばれる果実の下にナッツが実る。4 パートナーのライホーさん。



もっと知りたい
カシューナッツ産業支援

プロジェクトの詳細を
JICAのサイトでチェック